

## 目に見えない幸せ

情報工学科 2年 大石 舞

私はある時テレビで、「黒を知らなければ、白の白さはわからない」という言葉を耳にした。不幸を体験した人だけが、本当の幸せに気付けるのだと言う。「あしながおじさん」を読んで、この主人公は初めて、黒の中に白を見出せたのだと思った。

主人公であるジュディーは私と同じ年頃だが、その歳までずっと、孤児院で暮らしている。自分とは全く境遇の違う話だが、だからこそ自分の生活を省みる場面がいくつもあった。

女嫌いの評議員が、ジュディーの作文を気に入り、大学に入れてあげるところからこの物語は始まる。やっと孤児院から出られるのだから、彼女にとってこんなラッキーな事は無いだろう。だがこれは単なる偶然ではなく、ジュディーのこれまでの行いが良かったからだと思う。私も頑張った時、良い事が起こった経験があるからである。

しかしジュディーは長い孤児院生活のせいで、年頃の女の子同士のお喋りについて行けず、自分の無知さを思い知る事になる。またそれと同時に、世界の素晴らしさにも気付く。こんなちっぽけな事で、例えば、友達とバスケットボールの練習をする事や、週に二度のアイスクリームなんて、彼女からしたらとても幸福な事なのだ。しかし私も、まだまだ無知である。社会については知らない事だらけだ。

去年の冬、私は初めてアルバイトというものを経験した。決して楽ではなかったが、自分で働いてお金を頂くという事は、なんて有難い事なのだろうと思った。また、いつも働いてくれている両親に対して、感謝の気持ちでいっぱいになった。私は初めて貰ったお給料を、そのまま両親にプレゼントする事にした。その時の喜んでくれた顔を、今でもよく覚えている。ジュディーの様に、新しい世界を知って初めて得るものも、沢山あるのだと分かった。

そんな、毎日が発見だらけのジュディーは、その興奮を唯一身内のような存在である、ジョン・スミス（あしながおじさん）に手紙で伝え続けるのだが、返事が返ってくる事は絶対がない。しかし、ジュディーが病気で寝込んでしまった時、初めてあしながおじさんは、直筆のカードを送ってくれる。彼女はそこでやっと、顔も知らないあしながおじさんの人間味に触れ、声をたてて泣くのだ。この気持ちは、私にも解る気がする。

つい先日の事だった。私がテストの点が悪くて、とても落ち込んでいた時、仲の良い先生が励ましのメールを送ってくれた。その不器用だけど温かい言葉に、どんなに元気付けられたらいいか。人は一人で生きている訳はない。そばには必ず、自分を想ってくれている人がいる事を、忘れてはいけないと思った。

この本を読み終えて、周りを見渡してみると、私が今まで見えていなかった、たくさんの幸せがそこにはあった。こうして普通に生活している事こそが、何より幸せな事だった

のだ。私はそうした、「白の白さ」を少しだけ理解することができた。だからこれからは、この「白」を見失わないように、日々、小さな幸せにも感謝したいと思う。そして、ジュディーのように、真っ直ぐ、真面目に生きて行きたい。

そうすればいつか私にも、「あしながおじさん」のような、素敵な人が現れるかもしれないのだから。

『あしながおじさん』 J. ウェブスター著 角川書店